

機能主義、ネオ機能主義、文化社会学

—ジェフリー・アレクサンダー『社会学の理論論法』刊行30周年に寄せて—

Functionalism, Neofunctionalism, Cultural Sociology

— For Jeffrey Alexander's *Theoretical Logic in Sociology* —

鈴木 健之

(Takeshi SUZUKI)

はじめに

本稿は、ジェフリー・アレクサンダー『社会学の理論論法』(*Theoretical Logic in Sociology*, 4vols.)の理論的意義の査定を試みるものである。1982年に刊行が始まり、1983年に全巻刊行をみた『社会学の理論論法』は、経験的研究を特徴とするアメリカ社会学に対して、社会学の古典(マルクス・デュルケム・ウェーバー・パーソンズ)の徹底的な解読によって理論学説研究を擁護しつつ、自ら社会学理論の再構成に志向するという当時としてはきわめて異質で論争的な著作であった。アレクサンダーは、ドイツのハーバーマス、イギリスのギデンズ、それぞれの社会(学)理論の再構成の議論を考慮に入れながら、70年代のアメリカ社会学の分裂的状况に対して、社会学の〈リハビリ〉のための処方箋を「社会学の理論論法」(*theoretical logic in sociology*)として著したのであった。アレクサンダーによれば、社会学の最終的な目標は「多次元的な」(*multidimensional*)な社会学理論の構築にある、とされる。アレクサンダーは、唯物論的理論化と観念論的理論化とを結び合わせつつ、個人主義的理論化と集合主義的理論化との統合を目指すべく社会学理論はあらねばならないという基本前提に立ち、これらの統合=リンクの仕方を社会学の古典にみていったのである。アレクサンダーは、この水準での議論を「理論前提的」(*presuppositional*)議論と名づけ、社会学理論の歴史を論じていったのである。

アレクサンダーの理論前提的議論は社会学の前提であるにもかかわらず、『社会学の理論論法』はこの30年間忘れ去られてしまっている。本稿はその理論的意義の再確認を行うものである。

1. 行為理論、機能主義、ネオ機能主義

今誰がパーソンズを読むであろうか。パーソンズがかつて世界中に巻き起した興奮の大きさを現在のわれわれが理解することは難しい。パーソンズは奇妙でしかもはや満足しえない神——パーソンズはこの神を行為理論と名づけたのだが——の熱心な信徒であった。しかし、

パーソンズは自らの神に裏切られた。われわれはパーソンズを越えてしまったから。(Turner 1988; 3)

これは、ジョナサン・ターナーの著作、『社会的相互行為の理論』の冒頭にある一文である。ターナーは、パーソンズ・リバイバルの動向、たとえば、ジェフリー・アレクサンダー（1982-83, 1988）やリヒャルト・ミュンヒ（1982）の議論を十分に考慮してはいるものの、社会学のメタ理論に対してはきわめて懐疑的であり、より中範囲な水準での社会学理論に志向する。ターナーは、「行為＝秩序問題」の議論を行わず、実証的な社会学理論の再構成を一義とする（2002）。ターナーのパーソンズ批判はパーソンズ機能主義の応用不可能性を証明することと同義である。パーソンズ社会学理論は、ターナーの解釈によると、分類を旨とする要件機能主義に準拠した分析的図式と理解される。パーソンズ社会学理論は行為の概念化に始まり、要件機能主義で終わる。パーソンズの一連の理論化において、行為の組織化、つまり、相互行為の行程の理論化が欠如している（1988; 3-11）。

ターナーのパーソンズ批判は一面では正当である。パーソンズは、自らの社会学理論化、すなわち「行為理論」を特定化する際に、「機能主義」を採択した。パーソンズ型機能主義は、普遍主義という価値・規範の制度化・内面化の行程をシステムモデルによって分析するものである。パーソンズは、とくに、普遍主義の制度化過程に関心を注ぎ、具体的な問題として「シチズンシップ」を多面的に論じたのであった。これはパーソンズ社会学の理論的・実質的な現代社会学に対する最大の貢献点であった。しかし、パーソンズの機能主義は、普遍主義という価値・規範を所与として、その制度化過程に一義的な関心を注ぐために、多様なエージェントを想定できない。行為者が社会の新しい規範・価値を創造していく。この点が説明されない。これに対して、説明の手順を逆転させ、この空白部分の積極的な理論化を試みる点でターナーは正しい。ターナーは、規範偏重によるパーソンズの実体的な行為＝秩序観を批判し、さらに機能主義につきまとう「不当な目的論」と「同語反復」の問題を的確に指摘している。

しかし、われわれが注意せねばならないのは、ターナーの批判がパーソンズの機能主義にとどまらず、パーソンズ社会学全般に向けられている点である。ターナーの『社会的行為の構造』の冒頭部分のもじりは理論的根拠に欠く。われわれは「社会学理論を反証可能な水準から開始せよ」という主張には賛同したい。しかし「この次元のみで社会学理論を構成すべきだ」というターナーの主張には異議を唱えねばならない。

一方、パーソンズ派の社会学者たちはパーソンズ機能主義の経験的应用に志向し、他方、アンチ・パーソンズ派の社会学者たちは新たな社会学理論を構成してきた。両陣営の中間に位置するターナーは「社会学理論の再構成」という理論的目標をアレクサンダーらと共有しており、社会学理論化の多次元的編成を主張してきた。しかしターナーの社会学理論化には、古典的にはパーソンズが、そして現代においてはアレクサンダーが提起する諸社会学理論の理論前提的諸問題、行為と秩序問題は存在しない。ターナーは、パーソンズ社会学を機能主義として

位置づけようとするあまり、パーソンズ＝アレクサンダーが機能主義を超えて展開した「理論前提的議論」(presuppositional arguments)を見出せず、またその意義をも理解しえていないのである。

「理論前提的議論」はアレクサンダーが『社会学の理論論法 (1982-83)』において初めて用いたものである。それは、行為・秩序理解の相違に着目することによって諸社会科学・諸社会学の理論的射程を確定し、各理論に共通の「対話」の場を提供することによって諸伝統の連携を可能にしようとするものである。そしてその理論前提的議論の先駆的議論を展開したのがタルコット・パーソンズであった。パーソンズ (1937=1968) は、実証主義的理論体系、ならびに理念主義的理論体系の各分派の行為・秩序理解の違いから、それぞれの伝統において理論体系の下位分化が生じるという点を明らかにした。そこで、パーソンズは、一実証主義的理論化への排他的な還元、あるいは、一理念主義的理論化への一方的な還元を排し、諸学問領域、諸理論化の「対話」のための「媒介者」の役を引き受けたのであった。同様に、アレクサンダーは、パーソンズの理論前提的議論を引き継ぎ、戦後さまざまに専門分化を遂げた社会学を再び「対話」的關係に導こうとする。アレクサンダーの診断によれば、ポスト・パーソンズの時代は、理論なき混沌とした時代、とされる。各社会学的伝統を結びつける有機的なリンクが失われてしまった、とアレクサンダーは考える。したがって、アレクサンダーは、「もっとも形而上学的な理論的環境」において、しかし、パーソンズよりも特定の水準で、各社会学的伝統の「対話」のための仲介役を引き受けようとするのである。

ターナーにとどまらず、正統パーソンズ派の社会学者たちも、アンチ・パーソンズ派の社会学者たちも、これまで「理論前提的議論」には無関心であった。実証主義・経験主義の根強いアメリカの知的風土において、こうした議論は、仮説～方法の提示～結果～議論という科学的な論文の生産に従事している〈実証主義的〉社会学者の目には、宗教的、観念的な議論としかうつらないのだろう。しかし、パーソンズやアレクサンダーが突くのは、こうした理論家・理論集団が暗黙のうちにしたがる理論的前提である。ひとつの理論化の有効性は、その理論前提からして、おのずと限定される。けれども、自分の理論化こそもっとも有効であると主張し続けようとする（一理論化の「絶対化」、その結果としての他の理論化の「排除」）。結果として、社会学という学問領域において、複数のパラダイムの併存、競合、さらには対立という事態が生じたのである。パーソンズは、諸社会科学の前提を解説し、「古典的な理論前提的議論」、すなわち「行為理論」を構成することによって、ひとつの学問領域としての社会学の分化、そして社会学と他の学問領域との対話的關係を説明しようとした。アレクサンダーは、パーソンズと同様の観点から、戦後さまざまに分化した諸社会学的伝統の前提を解説し、「社会学の理論論法」を再構成することによって、社会学のひとつの専門分野としての「機能主義」の独自性と他の専門分野との対話的關係を論証しようとした。これに対して、ターナーの議論は、パーソンズ型機能主義批判としては正しいが、「理論前提的議論」としては不十分である。

パーソンズは行為理論を理論前提的議論から始める。パーソンズは理論前提の水準において

各理論化の前提を析出する。諸理論化相互に共通する対話の場が設定されれば、還元的理論化が回避され、諸理論の対話が始まるだろう。パーソンズ社会学は、ターナーが目標とする実証主義的な社会学理論化にのみ志向するものではなく、各理論化が暗黙裡に準拠している理論前提の解説をめざす。アレクサンダーも社会学理論化を理論前提の水準で開始する。しかし、アレクサンダーはパーソンズよりも特定の戦後さまざまな分化した各社会学的伝統の理論前提を析出する。新しい諸社会学理論化相互に共通する対話の場が設定されれば、還元的な社会学理論化が回避され、諸社会学理論の対話が始まるだろう。アレクサンダーは、パーソンズの理論前提的議論を引き継ぎ、さまざまな社会学理論の相互浸透を可能にしようとする。「科学の座標軸」(scientific continuum)において、多層的な言説が編成され、「還元」(reduction)的、あるいは「融合」(conflation)的な理論化が克服されるとき、アレクサンダーはこれを「多次元的」(multidimensional)と呼ぶ。

理論前提的議論が諸理論化の顕在的あるいは潜在的な理論前提を析出することをめざすという点。われわれはまずこの点を確認する。パーソンズ＝アレクサンダーは何よりもまず理論前提的議論を展開している。この時、彼らは「機能主義」という理論的境界を越えるのである。行為理論はこうして「社会学におけるメタ理論」の構築にも貢献しようとする。しかし行為理論は「哲学的」議論にとどまてはいない。行為理論は「実証的」な社会的分析、あるいは「人文的」な社会的解釈そのどちらにも志向する。行為理論はこの理論前提的議論に始まり、理論モデルの構成と応用へと志向する。この一連の理論化において、ポジティブな方法論的手続きが保持される。また、行為理論は、普遍主義的価値・規範の制度化・内面化の行程に関心を注ぎ、具体的経験的なフィールド・リサーチを展開する。行為理論は元来「システム」に関心を注ぐ。しかし、同時に「理論の理論」、「メタ理論」にも関心を注いでいる。行為理論は議論の出発点にパーソンズ、アレクサンダーの「理論前提的議論」を置いているのである。

2. 理論前提的議論の展開力

「理論前提的議論」がパーソンズ＝アレクサンダーといった機能主義者にとどまらず、さまざまな社会学的伝統の唱道者によっても展開されてきた点は注目される。たとえば、ジョージ・リッザーが編集した『社会理論のフロンティア (1990)』には、「機能主義」以外にも、コンフリクト理論、マルクス主義、シンボリック相互作用論、交換理論といった「伝統的」社会学においても、またエスノメソドロジー・会話分析、合理的選択理論、ポストモダン社会学、文化社会学、フェミニズム社会学といった「新しい」社会学においても、同様に、「理論前提的議論」へ関心の高まりを見て取れる。それぞれの社会学的伝統は、それまで暗黙の前提としていた「行為理解」と「秩序理解」を自覚化し、各伝統内部における「ミクロ・マクロ・リンク」、さらには一伝統を超えた「ミクロ・マクロ・リンク」に志向し始めている。もちろん、それぞれの伝統のうちで、対話が噛み合う場合もあれば、対話が平行線をたどる場合もある。あるいは、まったく対話が成立しない場合もあるかもしれない。しかし、対話の場だけは

設定された。

皮肉にも、この場をいち早く設定しえたのが、パーソンズであり、アレクサンダーであった。彼らは、いわゆる「機能主義者」であるが、「対話」の仲介役をつとめようとする限りにおいて、機能主義という伝統の枠を越えている。われわれは、まず、パーソンズとアレクサンダーが展開してきた理論前提的議論の射程から見ていくことにしよう。

2. 1. 機能主義理論前提的議論の射程

アレクサンダーの『社会学の理論論法（1982-83）』における議論の大部分は理論前提的議論の成立史に当てられる。アレクサンダーは、パーソンズの『社会的行為の構造』を、西欧思想における積年の理論論争に明示的な解決を与えた初めての書として高く評価する。アレクサンダーによれば、パーソンズのもっとも評価すべき社会学理論に対する貢献は、「古典的な理論前提的議論」を提出したことであると論じられる。

パーソンズは、まず「行為理論」において、1930年代当時の主流の理論（生物学）の理論前提を解説し、メタ理論の水準で生じる理論的ジレンマを描き出すことに成功する。そして、パーソンズは、より特定のに経済学の理論前提を解説し功利主義的ジレンマを、また理念主義的理論体系の理論前提を解説し理念主義的ジレンマを描き出すことに成功する。パーソンズは、実証主義的ジレンマ、理念主義的ジレンマを解決する方途を、主意主義的行為理論に求めたのであった。

理論化のもっとも形而上学的な理論環境において設定されるのが理論前提的議論である。それは行為＝秩序問題を提起する。諸理論化はそれぞれの行為＝秩序へのアプローチの特性によって分類される。行為へのアプローチは「規範的」か「条件的」かによって、秩序へのアプローチは、まず社会科学の諸理論化においては「一般的」か「特定の」かによって、次に社会学の諸理論化においては「個人主義的」か「集合主義的」かによって特徴づけられる。これを論理経験的に可能な形で組み合わせれば、まず、社会科学の領域においては、①経済学（条件的かつ一般的）、②政治学（条件的かつ特定の）、③社会学（規範的かつ特定の）、④人類学（規範的かつ一般的）という類型化が可能である。そして、社会学の領域においては、①交換理論（条件的かつ個人主義的）、②シンボリック相互作用論（規範的かつ個人主義的）、③機能主義（規範的かつ集合主義的）、④構造理論（条件的かつ集合主義的）という類型化が可能である。

パーソンズの第一の課題は、社会科学における主要学問領域の理論前提を解説しそれらの残余範疇を明示化すること、そしてこれらの残余範疇を認識しうる「理論体系論」を展開することにある。パーソンズはこの「理論前提的議論」の展開によって、一方で社会学の地位を、他方で社会学の多次元性を確保しようとする。

パーソンズはまず経済学的理論体系（ジョン・ロック的伝統）の理論前提を解説する。パーソンズは同時に経済学的理論体系の残余範疇が秩序の問題にあることを指摘し、その秩序問題解決のひとつの方途がトーマス・ホッブズに求められる点をも論じている。しかしパーソンズ

は第一に功利主義的理論体系の原型をロックに見て取り、このロック的伝統が古典派経済学を経由して新古典派経済学の流れ込む行程を描き出す。パーソンズはこうした一種独特の経済学史のレビューから、経済学の行為＝秩序へのアプローチがその条件的一般的性格ゆえに秩序を特定化しえないと結論づける。ロック的伝統は「利害の自然の一致」を前提としているがために秩序問題を極小化する。秩序を特定の論じようとするとき、パーソンズはロック的伝統を離れ、ホッブズの伝統に近づく。

パーソンズは第二に政治学的理論体系（トーマス・ホッブズの伝統）の理論前提を解説する。パーソンズは、政治学的理論体系の残余範疇が規範の問題にあることを指摘し、ホッブズの解決が最終的に規範的要素をすべて排除してしまう条件決定論となりうる点を指摘する。ホッブズの伝統はその条件的・特定の性格ゆえに行為の主意性を保証できない。ロック的伝統とは対照的に、ホッブズの伝統は「利害の人為的な一致」を前提とするために行為の主意性が失われる。主意主義的行為を特定の論じようとするとき、パーソンズはホッブズの伝統を離れるのである。

パーソンズは最後に理念主義的理論体系の理論前提を解説する。パーソンズは理念主義的理論体系における規範秩序、いわゆる「言説」を理念主義的体系が特定化できない点を指摘する。理念主義的体系は一般化された価値体系をア・プリオリに前提とし、価値体系の理想化に志向するだけである。したがって、理念主義的伝統は、秩序の特定性を確保することができない。規範的秩序を特定の論じようとするとき、パーソンズは理念主義的伝統を離れるのである。

パーソンズの理論前提的議論の結果、「社会学は、行為の主意主義的理解に、かつ秩序の特定の分析に志向する学である」という定義が獲得される。この理論前提的議論＝理論体系論は、「システム三分割」のモデリング＝行為システム論によって、実質を与えられる。こうして、パーソンズの行為理論は、規範的文化の制度化（文化システムの社会システムにおける制度化）、内面化（文化システムのパーソナリティシステムにおける内面化）の分析に志向するものとなった。

パーソンズの社会科学における理論前提的議論を社会学において徹底させようとする理論家がアレクサンダーである。アレクサンダーは、第一に、パーソンズの理論前提的議論が戦後の諸社会学理論化に共有されてきたことを確認し、戦後の諸社会学理論化が程度の差こそあれ行為の主意主義的理解を試み、特定の秩序の解明を試みてきたことを指摘する。この点に関してアレクサンダーはパーソンズの議論を踏襲している。しかし、パーソンズが社会学理論化の分化を予期しえなかった点。パーソンズ型の機能主義社会学に還元的な主張を行った点をアレクサンダーは批判するのである。

パーソンズの理論前提的議論からすれば、社会学は、①規範的一個人主義的理論化、②規範的一集合主義的理論化、③条件的一個人主義的理論化、④条件的一集合主義的理論化に分化することが可能である。しかしパーソンズが実際に展開した理論化は、②の規範的一集合主義的

理論化だけである。この社会学理論化は、「行為のコンティンジェンシー」と「条件的秩序」をひとまず所与のものとして、もっぱら規範的文化の制度化過程に理論的実質の関心を集中させる。したがって、これは社会学理論化のひとつであってすべてではない。規範的一集合主義的理論化は、自らの残余範疇を認め、自らの理論的限界を自覚せねばならない。多彩な諸社会学理論化の連合を可能にするのは、各々の理論化の「禁欲」である。けれども、パーソンズが規範的一集合主義的理論化を社会学のすべてとし、規範決定論者を公言するとき、パーソンズは、還元、融合の泥沼にはまり込んでしまう。パーソンズの理論化は、規範的個人主義的理論化、条件的個人主義的理論化、条件的集合主義的理論化、それぞれとの対話的關係を失い、規範決定論に陥るのである。

同様のことは他の理論化にもあてはまる。規範的一個人主義的理論化は、秩序を、条件的個人主義的理論化は、行為のコンティンジェンシーと規範的秩序を、それぞれ残余範疇とする。それぞれの理論化の射程・有効性は限定されている。よって、それらは、限定的な理論化の構築をめざしながら、さらなる対話に向かわねばならない。しかし専門領域を越えて、自分の理論化の独自性を主張してしまえば、その理論化は、還元・融合に頼らざるをえない。その結果として、他の理論化との有機的な連結点が失われるのである。

アレクサンダーは、社会学における理論前提的議論から戦後社会学理論化の分化過程を記述・分析し、さらに諸理論化におけるミクロ・マクロ・リンクの可能性を追求する。アレクサンダーの理論前提的議論は、諸社会学理論化に己の理論的射程の自覚化を促し、それぞれの理論化におけるミクロ・マクロ・リンクの可能性を明確にしている。さらに、ネオ機能主義の理論変動論は、戦後、諸社会学理論化が独自の分化を遂げ、独自の言説とリサーチ・プログラムを編成してきた点を明らかにしている。アレクサンダーは、パーソンズに従い、規範的集合主義的な社会学理論化、行為理論を継承している。しかしアレクサンダーはパーソンズの規範決定論を引き継いではない。機能主義の残余範疇であった行為のコンティンジェンシー問題、条件秩序の問題の解決がはかられるとき、機能主義は新たな理論発展の段階、ネオ機能主義の段階に入ったのである。

2. 2. 二つの学問観

われわれは、パーソンズ型理論前提的議論とアレクサンダー型理論前提的議論を継承する。しかし、われわれは、行為＝秩序観に関するふたりの根本的な相違、またその結果として生じる諸問題に注目しておく必要がある。アレクサンダーの議論が社会学に限定されているのに対して、パーソンズの理論前提的議論はより一般化された行為＝秩序問題に志向している。これは、二人の学問観の相違を意味し、ひいては科学観の相違をも意味している。結論を先取りして言えば、アレクサンダーが過度に限定された時間枠の中で、学問の対立・競合を見ようとするのに対して、パーソンズは、長く、過去・現在・未来と続く時間の流れを見据え、学問の多様な分化と学問の対話を見て取ろうとする。こうした学問観の違いは、二人の哲学的関心の相

違に由来する。アレクサンダーが「社会学者」にとどまろうとするのに対して、パーソンズは、アルフレッド・ノース・ホホワイトヘッドよろしく、「観念の冒険者」であろうとする。

アレクサンダーは、一社会学の・理論前提の析出に始まり、その歴史的背景、方法論、応用的実証的研究のレビューに議論を限定する。これに対して、パーソンズは、上述した理論前提的議論に加えて、諸学の歴史的分化と連合の諸過程を詳細に記述分析する。アレクサンダーが社会学における諸理論化の分化をトレースするのは正しい。しかし、アレクサンダーは、これら理論化の対話を十分に認識しえていない。さらに、アレクサンダーの理論前提的議論が、もっぱら、アメリカ社会学シーンにおける理論論争に向けられている点も見逃せない。アレクサンダーは、戦後アメリカ社会学シーンにおける理論なき実証研究に対して、あるいは諸理論の乱立状況に対して、諸理論化に共通の討論の場の設定を試みている。アレクサンダーの『社会学の理論論法』は、ハーバーマスの『コミュニケーション的行為理論』（1981）のアメリカ版と言うべきものである。合理主義的規範理論の言説が、アレクサンダーによって、アメリカで紹介される。アメリカ社会学シーンにおいて一般的観念的にしか映らないであろうハーバーマスの「理論前提的議論」を、アレクサンダーは、アメリカ的知的風土に適合するように言い換えている。

しかし、注意せねばならないのは、アレクサンダーの理論変動論、より特定的にはこの理論変動論から帰結する彼の学問観である。アレクサンダーは、戦後社会学第二期における理論集団の理論前提の解説を行い、理論化の生成・発展を記述分析する理論変動論を提出する（Alexander & Colomy 1992）。それによれば、諸理論化、彼らの言葉で言えば、伝統は、絶えざる「競合」を繰り返すものと理解される。諸理論化の競合こそが理論発展の原動力となると言う。アレクサンダーにとって、学問の分化は、競合を意味する。しかし、アレクサンダーは、ここで、曖昧な態度を取り続けざるをえない。アレクサンダーは、社会学の理論論法を再構成することによって、理論論争を終結させようとする。そのために、社会学における理論前提的議論が用意される。この理論前提的議論によって、諸理論化の連結点が確定され、多彩な諸理論化のリンクが可能になると論じる。けれども、ミクローマクロ・リンクを試みる際、アレクサンダーは、諸社会学理論化どうしの対話ではなく、一理論化内、機能主義的伝統のなかだけで、ミクローマクロ・リンクを試みようとする。そして、理論変動論を発表するに至って、アレクサンダーは、諸社会学理論化の対話・連合を放棄するのである。ネオ機能主義社会学は、便宜的に、他の理論化への越境を繰り返さざるをえない。アレクサンダーは、こうした越境を、多次元的、あるいはミクローマクロ・リンクと名づけ、自分の議論を正当化しようとする。同様の論法は、他の理論化への越境にも適用される。一社会学理論化は独自のミクローマクロ・リンクを試みながら他の理論化との対立を繰り返す。これら諸理論化の対立が理論空間で展開される。これぞ言説としての社会学だ、とアレクサンダーは論じたいのであろう。

われわれは、アレクサンダーの理論変動論を越えて、パーソンズ理論変動論に一度立ち返る必要がある。パーソンズは初期において学問（理論体系）の歴史的分化を記述分析し、諸学

(理論の下位体系)の対話を見取っている。パーソンズはまた行為システムのヒエラルキー的編成にも成功している。したがって、パーソンズ社会学に従うならば、多様な問題を多面的に扱うことができる。アレクサンダーの理論前提的議論が戦後社会学理論化の整理箱に成り下がる危険性をもつものに対して、パーソンズの理論前提的議論は、諸理論化を連合させるための理論前提的議論たりうる。パーソンズは、まず、社会科学の理論前提的議論を行う。ここで社会科学における諸理論化の分化と相互浸透が歴史的・特定の証明される。かつ、行為システム論の展開によって、パーソンズは文化を社会の水準で具体的に論じることができる。経済の特定の秩序を分析することができる。あるいは政治の規範的文化を解釈することができるのである。

諸社会学理論化は、規範的行為—限定的秩序の学という規範を制度化(内面化)しながら、さらなる学問的分化を遂げてきた。この歴史的記述に関しては、アレクサンダーの理論前提的議論でことたりる。しかし社会学の理論体系において対話を見ようとするとき、われわれはアレクサンダーを越えていかねばならない。

パーソンズは理論前提的議論に導かれシステム三分割モデルを構成することによって、社会システムの水準で限定的規範的文化(パーソンズの場合、アメリカ)の制度化・内面化の分析を展開した。われわれは、リヒャルト・ミュンヒが行ったように、パーソンズが設定した理論体系に従いながら、行為システム論、行為空間(行為=秩序)の重箱の階層性を明確化することができる。パーソンズが最晩年に設定した「人間の条件」(Parsons 1978)という行為システムの水準は時間—空間的な特定性を被ることなく設定される。ここにパーソンズの世界観(秩序観)が凝縮される。それは、ホワイトヘッド=ヘンダーソンに源流をもつ「科学観・学問観」である。混沌の中から、あるいは対立の中から、新しい秩序が生まれていく。プロセスとしての知は、パーソンズ社会学を根底において特徴づけている。そして、パーソンズが具体的に展開する行為システム論は、この自己組織的な知の進化に基づいているのである。われわれがパーソンズ行為システムを上り詰めるとき、そこに究極的な価値が登場する。晩年のパーソンズはそれを「テリック・システム」と名づける。一方、われわれがパーソンズ行為システムを下り切ると、そこに究極的な条件システムが登場する。それがホワイトヘッド=ヘンダーソンの言う自然の秩序である。究極的な行為=秩序は、一方で特定化を、他方で一般化を繰り返しながら、媒介的な行為=秩序、社会システムに変換される。社会学理論化は行為システムの水準と社会システムの水準で構成される。行為システム論には、パーソンズの人間観、社会観、宇宙観が凝縮されているのである。

3. 多次元的な社会学理論化のために

パーソンズの行為理論は行為=秩序の多次元的な認識・編成を可能にする。行為理論は、人間の条件、行為システム、社会システムの重箱型階層構造をなすものとして理解される。行為システムの多次元認識に哲学的基礎を提供するものが「システム哲学」である。個の中に全

を見、全の中に個を見るというシステムの世界観は、ヘンダーソン経由で、ホワイトヘッドからパーソンズが継承するところのものである。パーソンズは、一方でホワイトヘッドの抽象にしたがうことによって秩序の形式的構造の析出に成功し、他方でヘンダーソンの社会システム論を徹底化することによって初期の理論前提的議論を特定化し、機能主義を編成することに成功する。人間の条件のパラダイムにおける究極的な規範＝秩序は、行為システムを経由して、社会システムへ特定化される。あるいはその反対に、究極的な条件＝秩序は、行為システムを経由して、人間の条件へと一般化される。われわれは、こうした行為システムの一般化と特定化のプロセスに、パーソンズによる社会学理論化の多次元的編成を看取することができるのである。

けれども行為システム論の徹底化はパーソンズによって成就されえない。パーソンズが採用する方法、分析的機能主義は、ジョナサン・ターナーが指摘するとおり、比較と分類を旨とする。しかしそれは不当な目的論と同語反復に陥る危険性を持つ。また概念の体系を目標とするパーソンズの理論化は、経験的な命題化をすべて拒否する傾向を持つ。確かに、パーソンズ社会学理論化は、より経験的な命題の体系に特定化できる。けれども、パーソンズは、概念の体系、要件機能主義に固執し続けるあまりに、社会学理論化のさらなる特定化を十分に展開できないのである。

したがって行為システム論のさらなる特定化がパーソンズ派、ポスト・パーソンズ派の理論的・経験的課題となる。たとえば、アレクサンダーは、ヒエラルキー的なパーソンズ行為システム論を社会システム論の水準で特定化し、諸社会学理論化を「科学の座標軸」上に水平的に再構成することを主張する。しかし両者の論理構造は同じである。アレクサンダーは次のように主張する。一社会学理論化は、もっとも形而上学的な理論環境（座標軸の最左翼）において、行為＝秩序問題を解決せねばならない。一社会学理論化は、明示的にあるいは暗黙裡に自らの世界観（イデオロギー）にしたがう。一社会学理論化は、一般化された言説を前提としながら、モデリング・命題化によって経験的・実証的な分析に志向すると。アレクサンダーは、パーソンズが最終的な社会学理論化の目標として掲げる概念の体系、そしてその理論的戦術、機能主義を共有する。しかし、自らの理論化において、アレクサンダーは、パーソンズのモデリング（システム三分割モデル）のさらなる特定化、検証可能な命題化に志向し、壮大なパーソンズ社会学に実質を与えようとする。

こうしたアレクサンダーの社会システム論は、「社会学における理論の論理」を再構成しようとする野心的な試みであり、その有効性はいくら強調しても強調しすぎることはない。けれども、アレクサンダーは社会学理論化における因果連鎖の特定化のプロセスやモデリングからの命題化のプロセスを明示的に議論しようとししない。アレクサンダーは、ポスト実証主義的理論変動論という科学観を披露し、さらに理論モデルの多次元性を強調する。しかし、アレクサンダーは、積年の実証主義的説得と人文主義的説得の不幸な二分法にはまり込み、理論的ジレンマに悩まされている。アレクサンダーは、社会学理論化において、実証主義的理論化（公理

的理論化、数理的理論化、中範囲理論化など）を不適切な理論化として拒否する。しかし、アレクサンダーは、一般化された言説を特定化の際、便宜的に実証主義にコミットし、実証主義的なモデリングを構成しようとする。アレクサンダーは、科学の座標軸において、もっとも経験的な理論環境からもっとも形而上学的な理論環境まで、理論化の段階を多次元的に設定する。しかし、アレクサンダーは、因果連鎖の特定化を明示的に行おうとしない。結局、アレクサンダーが唱道するネオ機能主義のリサーチ・プログラムの方法的基礎が何であるのかは不明のままであった。

この理論的空白を埋めるべく登場するのがジョナサン・ターナーの社会学理論化である。ターナーがパーソンズの理論前提的議論を哲学と評している点は批判されねばならないが、彼のパーソンズ型機能主義批判は適正に評価されねばならない。ターナーは、パーソンズ社会学が多様な社会秩序分析に応用可能な命題を数多く含んでいる点、またパーソンズが「一般システム理論」の下に、さまざまな機能主義の分派を包摂しようとしていた点を高く評価する。しかし、ターナーは、パーソンズ型要件機能主義が不当な目的論と同語反復に陥る危険性を持ち合わせている点、また複雑な因果連鎖を説明できていない点を批判し、パーソンズ型機能主義者とは一線を画す。ネオ機能主義者のミクロ・マクロ・リンクに対して、ターナーならば、それは複雑な因果連鎖を特定できない観念的理論化に過ぎない、と断定するであろう。ターナーは、まず、定義、コンセプト、ステートメント、フォーマットという一連の理論化の行程を設定し、理論化の出発点をフォーマットに置く。さらに彼は、このフォーマットがメタ理論図式、分析的図式、命題的図式、モデリング図式に分化する点を議論する。アレクサンダーの社会学理論化は、このフォーマットの「メタ理論図式（行為＝秩序問題／理論前提的議論）」と「分析的図式」に関わるものでしかなく、命題化を行うものではない。ターナーは、命題図式をさらに、公理的フォーマット、形式的フォーマット、経験的フォーマットに分類し、数理化・形式化に志向する社会学理論化と、より中範囲・経験的領域に志向する社会学理論化とを区別する。ターナーは、理論化のさらなる特定化に志向することによって、機能主義的理論化における反証可能性の確保につとめている。

こうしたターナーの社会学理論化は健全でありかつ展開力をもっている。しかしそれがすべてではない。ターナーが前提とする理論化は実証的な社会学理論化のみである。ターナーの社会学的説明はつねに実証的な命題化に志向しようとする。パーソンズやアレクサンダーの理論前提的議論は、ターナーの目には観念的、抽象的、哲学的にしか映らない。したがって、本来、実証的な理論化に志向しない「人文主義的な説得」をターナーは敢えて議論しないのである。

このターナー問題を解決しようとするのがリヒャルト・ミュンヒである。ミュンヒはパーソンズ行為理論の復活をめざし、メタ社会学理論の構築に専心してきた。行為理論とは、ミュンヒの場合、社会学のメタ理論を言う。ミュンヒは、社会学における方法論的アプローチを、法則定立的、理念型的、個性記述的、構成主義的に、社会学的説明を、因果的、目的論的、規範

的解釈的、合理的解釈的に分類する。ターナーは、方法論的アプローチにおいて、理念型から法則定立へと向かい、個性記述的アプローチを科学以前、構成主義的アプローチを哲学として退ける。さらに、ターナーは、社会学的説明において、目的論を避け因果的説明に向かい、規範的解釈の説明（たとえば、バーガー＝ルックマンの現象学的社会学）、合理的解釈の説明（たとえば、ハーバーマスのコミュニケーション論）をこれまた哲学として退ける。ミュンヒは、人文主義的説得に志向する社会学的伝統と実証主義的説得に志向する社会学的伝統の両方を議論する。人文主義的説得、実証主義的説得はともに生来の理論的ジレンマに陥らざるをえない。これに対して、行為理論はこれらの方法論的アプローチならびに社会学的説明を段階的・連続的に組み合わせることによって、多次元的な社会学理論の構成を可能にするものである。

彼らは一見すると排他的に見える。ターナーは、パーソンズに対して批判的であるし、アレクサンダーとミュンヒは、ターナーに対して、ターナーはアレクサンダーとミュンヒに対して批判的である。しかし、われわれは、彼らの社会学理論化が連続的・連携的な関係になっている点を強調する。パーソンズの社会学が特定化されるとき、アレクサンダーの社会学が登場し、アレクサンダーの社会学が特定化されるとき、ターナーの社会学が登場する。翻って、アレクサンダーとターナーの社会学が一般化されるときミュンヒの社会学が登場する。したがって、行為システムのヒエラルキー的構造において、彼らの理論化は、まさに多次元的に秩序づけられる。このとき彼らの社会学は螺旋的に連合するのである。機能主義の哲学的基礎がホワイトヘッド－ヘンダーソン－パーソンズの永続的な対話的關係によって規定されるように、社会学的機能主義的方法的基礎はミュンヒ－アレクサンダー－ターナーの対話的關係によって規定される。われわれが構想する社会学理論化は、これらの二重のトライアングルを螺旋型に連合しながら、多次元的な社会学理論に志向するものである。ミュンヒは機能主義の哲学的基礎づけに失敗した。確かにミュンヒが言うように、パーソンズ社会学はきわめてカント的に見える。しかしパーソンズ行為＝秩序システムの哲学的含意を解説するとき、われわれは、カントではなく、ホワイトヘッドを見出す（鈴木、2005年）。行為システムを螺旋的に階層化するとき、パーソンズはホワイトヘッドにしたがう。そしてこの行為システムの重箱型階層構造において、パーソンズは行為システム論と理論体系論を展開する。後者において、諸理論化は、緩慢に、そして有機的に連合する。諸学は緩慢な分化と連合を繰り返しながら進化していく。ホワイトヘッドは、終生変わらず、学問の進化を説き続け、観念の冒険を繰り返す。同様に、パーソンズも自らの学問の生涯において社会学の進化を説き続け、社会学版「観念の冒険」を繰り返す。

集合主義的規範主義的理論、機能主義は多次元的に再構成されうる。そして、それは、まず何よりも、理論前提的議論に志向する。アレクサンダーならば、それを「言説としての社会学」と言うだろう。そしてそのさらなる特定化の試み、理論運動をネオ機能主義と名づけるだろう。アレクサンダーは社会学における理論前提的議論を徹底化させようとする。しかし機能主義に固執すればするほど、アレクサンダーは多次元的社会学理論化から遠ざかってしまう。

結局、アレクサンダーの機能主義は多次元的に再構成されず、ネオ機能主義というプロジェクトも放棄してしまった。パーソンズ再考の試みは、ミュンヒとアレクサンダーの失敗を教訓にして、再開されねばならないだろう。

【参考文献】

- Alexander, Jeffrey C., 1982-83. *Theoretical Logic in Sociology*. (4 vols.) Berkeley: University of California Press.
(『社会学の理論論法』佐藤成基・鈴木健之訳 青木書店より刊行予定)
- —, 1988. *Action and Its Environments*. New York: Columbia University Press.
- —, et al. eds. 1987. *The Micro-Macro Link*. Berkeley: University of California Press.
(『ミクロ・マクロ・リンクの社会理論』(部分訳) 石井幸夫他訳 新泉社 1998年)
- Alexander, Jeffrey and Paul Colomy. 1992. "Traditions and Competition: Preface to a Postpositivist Approach to Knowledge Accumulation," In *Metatheorizing* (ed. by George Ritzer) 27-52.
- Habermas, Jürgen. 1981. *Thorie des kommunikativen Handelns*. Frankfurt: Suhrkamp.
(『コミュニケーション的行為の理論』河上倫逸他訳 未来社 1985年～1987年)
- Henderson, Lawrence, J., 1970. *Social System*. Chicago: University of Chicago Press.
- Münch, Richard, 1982. *Theorie des Handelns*. Frankfurt: Suhrkamp.
- Parsons, Talcott, 1937=1968. *The Structure of Social Action*. New York: Free Press.
(『社会的行為の構造』稲上毅他訳 木鐸社 1974年～1989年)
- Parsons, Talcott. 1978. *Action Theory and the Human Condition*. New York: Free Press.
(『宗教の社会学』、『人間の条件パラダイム』富永健一他訳 勁草書房 2002年)
- Ritzer, George. ed. 1990. *Frontiers of Social Theory*. New York: Columbia University Press.
- 鈴木健之、2005年「パーソンズ社会学の本質——カント、ホワイトヘッド、パーソンズ——」『比較文化研究所年報』(盛岡大学) 15号29～37頁。
- 鈴木健之、2009年「ネオ機能主義以後のアレクサンダー——個人化する社会に抗して——」『社会学史研究』 31号35～50頁。
- Turner, Jonathan H., 1988. *Theory of Social Interaction*. Stanford: Stanford University Press.
- —, 2002. *The Structure of Sociological Theory*. (Seventh Edition) Wadsworth Publishers.
- Whitehead, Alfred N., 1933=1955. *Adventures of Ideas*. New York: New American Library.
(『観念の冒険』(『ホワイトヘッド著作集12』) 山本誠作・菱木正晴訳 松籟社 1982年)